慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	浜野文庫善本略解題(五)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1994
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.29 (1994.) ,p.311- 348
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0311

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜野文庫善本略解題（五）

大沼晴暉

例言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、四の函架番号が附される稀覯本の中から、前回に続いて第五四迄を取上げ、旧斯道文庫蔵の一点を附し、略解を加えたものである。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。また著者や当該書については、人名辞書や索引・伝記・解題書・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。本稿は各専門家の精査を俟つためのもので、その呼水となれば幸で

ある。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、本略解題は折を見て、随時継続発表の予定である。お気づきの点を何なりとお知らせ頂ければ幸甚である。

附記　本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

四　稀覯本（承前）

蕉窓文草（題簽）　林述斎（衡）　写（〔林壮軒〕等寄合書）　大四冊　林〔壮軒〕手沢本

黄土色表紙（二六・一×一九・一糎）単辺刷枠題簽に「蕉窓文草　一（―四）」と書さる。内題なく、「管仲像賛」を以て始まる。単辺（二四・三×一六・一糎）有界七行二〇字茶刷野紙使用。版心部なく、裏丁書脳部下端に「聴雨書屋蔵」と刻さる。第一冊四五、第二冊六二、第三冊五八、第四冊二五丁。第一冊巻末に「嘉永三年夏四月八日／孫健謹読数過」、同じく第二冊末「庚戌首夏初九日　孫健謹読了」、第三冊末「四月十二日　孫健謹読」の朱識語がある。一作毎に丁を改めて書写され、第一作にのみ朱句点が附さる。胡粉・削去による訂正が為され、僅に朱墨校字が施されている。一手は壮軒か、とやや大字の二手から成り、一作毎に葉を換えて写し、後一書に整えたものであろう。編成は一―序、二―碑碣銘、三―跋、四―賛を主とするが、一部混乱がある。

述斎の文草は江戸時代には未刻で、本書等を底本とし、大正一四年から一五年七月にかけ、東京の崇文院より崇文叢書の第一輯五―七として、三巻幷拾遺が始めて刊行された。その「凡例三条」に校刊の事情が詳らかである。

一是書原本。得之林君曄浜野君知三郎。林君為述斎支族。林本小巻四冊。大巻三冊。其所収。微有異同。浜野本大巻四冊。今対観之。互有出入。而各本無目録。又編集無倫次。或有本文無題者。乃按文意而署題。更次第而為目録。以便覧閲。君子勿咎僭越幸甚。

一林本巻末有文政癸未春孟校読煒九字。煒即復斎也。浜野本亦有嘉永三年夏四月八日孫健謹読数過十五字。健即壮

軒也。皆襲称大学頭。而各本為林氏旧蔵無疑也。但各本誤字不少。今具加校訂。

一自各本而外。尚有載事実文編。此捉刀者代為之。亦未可知。然詳玩筆意。似不出他手。因別為拾遺。又自佚存叢書抄出。以附載之。

大正十四年七月下旬　　校訂者館森鴻識

書物は公刊される折、種々の合理化が行われ勝である。崇文叢書本も利便の為に目録を附したのは許されようが、無題のものに署題を識したのは如何であろうか。ともあれ、林家蔵二種と本書とをもとに、校訂者が編成等も含めてかなり改めたようである。校訂次に最も心しなければならぬのは、実は校訂者が新しい異本を作り出してしまうことであろう。跋文で「嗟乎。天運循環。時移世変。名門閥閲。盛衰存亡。幾不可紀。先賢遺書。散失亦衆。独是集得存而行於世。則林浜野二君之力也。余深喜之。世之欲明学術正人心者。其有所取焉」と、折角顕彰された浜野氏の蔵儲も、その生殺は校訂者の手にある。

因みに述斎の詩草は、林晞蔵述斎手定大本二巻（同蔵写本小本六巻は述斎手定に非ざれば姑く置くとあり）に、坊間獲易からぬ刻本家園漫吟・墨上漁謡・谷口樵唱の三書を併せ、四巻本として、同時に崇文叢書第一輯の八・九に翻印されている。

林述斎、岩村藩公子、林家中興の祖とも云うべく、天保一二年没、享年七十四。孫壮軒、第十代大学頭、嘉永六年没、享年二十六。ハ〇九―四―一六―四

諸家蔵書印譜　森〔枳園〕・森〔梫庭〕（約之）編　自筆

半二冊

黄色布目表紙（二三・九×一七・五糎）に直に「諸家蔵書印譜　乾（坤）」と書さる。枳園の筆。巻頭「諸家蔵書印譜　乾（坤）巻」と題され、双辺「菅家」朱印・「一貫庵」墨印・単辺「天師明経儒」朱印・双辺「多福文庫」陰刻朱印を収む。単辺（一八・九五×一三・一糎）無界、毎半葉別郭の烏糸欄を設け、各半葉四顆を標準とし、朱墨藍にて摸写或いは実印を押捺せしを切取りて貼附したる印譜貼交帖。ま枳園・梫庭等の墨筆注記あり。坤第一二丁より「以下森養真約之旦礼父所増」として、梫庭が増補した部分となるが、摸写粗く混雑して貼附す。乾三〇丁、但し袋綴中一三片の印影挿込まる。坤三〇丁、但し内四丁は印影なし。紙面に三葉の印影挟込まる。巻頭に「森／氏」の朱印が鈐せられている。

本書は、立之・約之父子が、諸書から摸写或いは切取った蔵

書印を貼込んだ印譜で、綴じの袋中に未だ多くの印影を残す如く、未整のものである。書誌学に入り、諸書を目覩すること多かった立之が、参考のため編修、子約之が意を継いだものであろうが、父を遺して明治四年急逝、再び立之の手で編み継がれたものであろう。

本書中には、名物「漢／委奴／国王」印も押捺され、墨銘かと思われる左文字のものや、其角已来伝蔵者と云う深川湖十点印も見られる。巻末に「兼之誌」の「浅艸文庫」板坂卜斎に関する標記一条あり。曲直瀬家の「養安院蔵書」印には、「南郭／書」の注記が存する。

蔵書印譜は、書肆慶元堂主松沢老泉の手になる「経籍答問」所収のもの等が古い例であろう。

森枳園立之・梶庭約之父子に就きては前稿既出。ハ〇九―四―一七―二

諸書鈔録（題簽）　伊沢〔蘭軒〕（信恬）　写（〔浜野知三郎〕）　大一冊

青緑色表紙（二七・一五×一八・四糎）双辺刷枠題簽に「諸書鈔録伊沢蘭軒」と書さる。罫紙一丁を遊紙とし、「韓非子　伊沢信恬」と題し、「心腹之病」と朱書小題して引録。双辺（二二・二×一四・八五糎）有界一〇行白口単黒魚尾、裏丁匡郭外下端書脳部に「松屋製」とある藍刷罫紙使用。行二一字小字双行。朱句点校字を交え、標記等もそのまま写せしものならむ。裏表紙前罫紙一丁を遊紙とす。墨付二四丁。

「漢書撮鈔」は、

文化十三年二月十七日発業

校讐本

宋本宋祁附注狩谷卿雲蔵

明本毛晋十七史中所収

一本明汪文盛高敞伝汝舟所校

活板本原本朝鮮本家蔵

と、書誌学の徒らしく底本を明記している。本項より、項目小題も朱書されない。次に史記から引き、以下追込で、玉台新詠・礼記・北堂書鈔・群書理要（ママ）・文選・孝経・初学記・亢倉子・白雲詩集三巻一本元僧英実存・御製聖教序　西域記・孟子等の各項につき、白雲は曠園襍志、孟子は北夢瑣言、他は大唐新語より関連記事を引録する。標題せる項目を、引録文中では――と省筆せし箇所あり。后・前と朱書して入れ換えを表示した二箇所があり、恬按或いは〇按等とした朱墨の按語がある。韓非子

は一格を低した「太田方曰」の注解附きで、恐らく同藩の福山藩儒太田全斎の木活本翼毳に依ったものであろう。項目は格言式の詞を含め、広い意味での医学に関わるものが多い。漢書撮鈔から一例を引く。

毒薬苦口

張良曰、――――利於病、張良

「見在書」等書誌学に関する項目も存する。

なお、本書の森枳園旧蔵、蘭軒手抄本が、京都大学附属図書館富士川文庫に存する。此によると、三種の野紙に夫々書写された別種の鈔記を、後に合せ綴じたものであることが知られる。群書理要の項、版心には「群書治要」と書かれている。

伊沢蘭軒、鷗外の史伝で知らる。福山藩儒医、豊洲塾の同門狩谷棭斎と親しく、書誌学に入る。文政一二年没、享年五十三。ハ〇九―四―一八―一

蘭軒医談〔伊沢〕蘭軒撰　森〔枳園〕（立之）録　安政三年八月序刊（福山　問津館蔵板）　半一冊　木活香色表紙（二二・八×一五・七糎）題簽に「蘭軒医談」と書さる。安政丙辰仲秋於江戸城北駒米里華他巷之温知薬堂　福山森立之（朱印二顆押捺）と題する〔序〕一丁あり。巻頭「蘭軒医談／福山　森立之華記」と題署す。単辺（一四・六×一〇・一糎）無界九行一七字小字双行。版心白口単黒魚尾、上象鼻に「蘭軒医談」、下象鼻「問津館蔵」、中縫に丁付。尾題「蘭軒医談」。三九丁。

本書成立・刊行の事情に就きては、森枳園の序に詳しい。

余以天保間遊于相陽刀圭餘暇採薬於巖嶺釣魚……偶探書笈得幼時侍蘭軒先生所筆記医談若干条遂録成冊子未遑校字抛在架中近日有頻請伝写者因訂訛芟複活字刷印以胎之併示同人云

例に依って一・二条を摘録する。

鼓ハ説文ニ配塩幽赤也トイヘリコレ只四字ニテ鼓ノ造法尽タリト西京叢語ニ論ゼリ薬用ニハ淡豆鼓ヲ用ユ即塩ヲ加ザルモノニテ今ノカラナツタフコレナリ千金癰腫門ニ豆鼓餅上ニ灸スルコトアリ肘後ニ葱鼓粥アリコレ味噌灸葱雑炊ノ濫觴ナリスベテ鼓ノ代用ハ味噌ニテスムコトナリ元禄中唐僧茴亭長崎ヘ来リ味噌ヲ昉テ詩ニ作リ米梭ノ字ヲ用ユ此詩蕭鳴草ニ出ヅコレニテ此方ノ味噌ト同法ノ物絶テ彼土ニ無キコトヲ徴スベシ

アル田家ノ一老婆消渇ヲ病ム飲水甚多シテ大小便共ニ閉ヂ

渾身水腫シテ百治効ナシ煩悶将死或人ノ青カヘルヲ生ニテ食ヘバ必愈ルヨシス、ムレド活物ヲ食フニ忍ビズトテ只服薬ノミニテアリシニ一夕煩渇更ニ甚シ因テ看病人ノ眠ルヲ伺テヤウヤウ匍匐シデ手桶ノ水ヲ飲ントセシニ適桶ノ箍ハ子テ水一滴モナシ遥ニ庭上ニ水音アルヲ聞キ又ソロソロト匍匐シテ遂ニ筧ノ下ニ至リ手ヲ掬シテ先飲ムニ口中ニ何カサハルモノアリシト思ヒナガラ大渇ノアマリニ呑下シテケリ再ヒ手ヲ掬シテ水ヲウケシニ又手中ニ物アリト覚ヘシユヘ折節月光昼ノ如クナリケレバコレヲ熟視スルニ一ツノ青カヘルナリコレゾ天ノ与ヘト兼テ飲メトス、メシ人ノ有シヲ思出シテ又コレヲ呑ム又掬スルニ又得タリ凡テ青蛙三枚ヲ呑タリサテ漸病牀ヘ行ントセシニ家ニ入ラザルウチニ卒カニ両便トモニ大ニ利シ忽爽快ヲ覚エ水腫頓ニ減シ続テ下利数行ヲ得テ漸々平復セリコレ一大奇事ト思ヒシニ証治要訣ニ凡渾身水腫或単腹脹者以青黿一二枚去皮炙食之則自消也ト云ヘリ其後此証ニ遇ハ試ント思トモ未及バズ

なお、本木活本の枳園自筆の原稿底本が、京都大学附属図書館富士川文庫に存する。薄様紙中一冊。行格は本版と同じで、先に引用した序の眉上に、「巖ハ岩ニテモヨロシク谿渓ニテモ宜シク」等と、指定の詞が書入れられている。

また、次掲本の編者清川孫による嘉永五年一二月写本も存し、版本以前の姿を示して、木活本とはやや出入がある。書写奥書は、「嘉永壬子五歳臘月廿六夜与五更／鐘声共写終　清川孫謹記／（以下朱書）後廿八夜三更校了　孫」。

伊沢蘭軒、その弟子森枳園共前出。ハ〇九―四―一九―一

榛軒詩存　〔伊沢〕榛軒撰　清川孫編　写（〔浜野知三郎〕）　半一冊

小豆色表紙（二四・二×一七・〇糎）双辺刷枠題簽に「榛軒詩存伊沢信厚著　完」と書さる。野紙一丁を遊紙とし、安政五年歳次戊午仲冬之月　清川孫謹誌〔序〕一丁。巻頭「榛軒詩存」と題し、「嘉永四辛亥元旦、与塾中諸子同分韵得肴、近／日諸子学術頗進、後句及之」と詞書して、詩を載す。左右双辺（一八・一五×一二・〇五糎）有界一〇行白口単白魚尾墨刷野紙使用。行二〇字。朱の句点圏点を附す。本文二二丁。後に野紙二丁遊紙として綴じらる。

本書成立の事情は、清川孫の序に詳しい。

先師　榛軒先生、刀圭之暇、毎遇心愉而意会、輙発之声詩、其所吟詠頗多、而未曾留稿也、孫在塾日、或得之侍坐之傾

聴、或得之壁上之漫題、或得之扇頭紙尾、或得之同門諸子之伝誦、随得随録、無復次第、積年之久、得百有餘首、今茲安政戊午十一月十六日、実当　先生七回忌辰矣、追憶往事、宛然在目、殆不勝懐旧之嘆也、乃浄写為一冊、私名曰榛軒詩存、雖未足為全豹、亦足以窺　先生風騒之一斑也已、嗚呼　先生不欲存、而孫存之、縦令得罪于地下、亦所不敢辞也、其巻末存餘紙者、以備続得云、

存するを欲せぬ師の著作を後世に残すは、地下に罪を得るか天下に功を成すか、なかなかに難しい。森潤三郎氏は、「考証学者伊沢蘭軒父子及び渋江抽斎森枳園の一面」（考証学論攷所収）に、次の如く云う。

伊沢蘭軒は多紀藍渓、桂山父子と世を同うして出で、父子が等身の書を著すを見て、之と長を争ふを欲せず、且つ述作の事たる、功あれば又過がある。いかに博聞達識であつても醇中に疵を交ふることを免かれない。蘭軒は此の如く思惟して意を述作に絶ち、全力を古書の研鑽に竭し、そして体得した処を治療に応用した。柏軒、榛軒ともに父の遺風を尋で、著述の筆を執らなかつた。

本書巻末の「春尽三月晦賜題　同年（天保元）」の第三首は、「桃花漫逐柳花飛雨送軽寒歎薄衣杜宇頻催春色去以下欠脱」とあり、底本は足本でなかったらしい。「次渡辺樵山韵」の、本稿㈡所載、慊堂の弟子渡辺樵山との詩の贈答や、「贈栢軒栢軒来諫過酒、」の、三弟栢軒との交渉等、榛軒の交友や為人を知る資料も多い。今「与諸友遊墨沱関屋里、戯捕亀、亀尿汚定良大人衣服、因戯賦呈」の七言絶句一首を掲出する。

鉄甲将軍名玄武、天宮令使詔何人、乍逢仙骨不凡客、瀉与霊漿洗俗塵、

なお、慶応義塾大学北里記念医学図書館に、「万延元庚申冬月一校了約之侵庭」と署する写本が存する。書体は清川孫に似るも、巻末四丁は約之の増補か。此書も「春尽……」の詩は「以下欠脱」とあり、後に野紙が九丁ほど白紙のままに綴じられている。因みに、野紙には、版心に「医心方」「医心方巻」「医心方巻七　二十五」と刻されたもの等五種が使用されている。

伊沢榛軒、蘭軒の長子にして福山藩儒医を継ぐ。嘉永五年没、享年四十九。編者の清川孫は、本文中に「次清川安策之韵」「句首用清清川安策之字」等とある安策と同人か。生没年未詳。ハ〇九―四―二〇―一

続〔日本〕後紀考異　写（寄合書）　半一冊　塙氏温故堂文庫旧蔵

朱色空押鶴丸菱花文表紙（二三・三×一五・七糎）に直に「続日本後紀考異」と書す。校斎の筆に似たり。右下「東五」と函号を識した貼紙あり。扉、野紙左肩に「続後紀考異」と書さる。扉裏「一（―八）スム後　九（十）スム大脇　十一（十二）スム後（小字朱書）　十三（―十九）スム山科　廿／明厂本旧我所蔵也」と目次、小書は考異の担当者名か、一丁。巻頭「続後紀考異流布ノ板本ト校」と題し、「一丁右七行誉ヲ誉ニ　一丁右四行縄ヲ綱ニ」の如く記さる。双辺（一九・六×一三・六五糎）有界一二行白口墨刷野紙第一―三丁。双辺（一九・二×一二・二糎）有界一〇行、下象鼻に「井々堂蔵」と刻する墨刷野紙―扉・第四―一三丁。書写は上下二段に為され、各分担者によって書写の体式はやや異る。例えば、巻二より二十迄追込で書かれているが、巻第九・十の大脇担当分は別丁となっており、巻十三からの山科担当分は、野紙版心部表丁中縫下端に一（―四）の丁付が書されている。巻次も、大脇担当分は「〇巻第九（十）」、他は「〇巻二（―二十）」とする。考異要項の合意の上に、各人が分担部分を書写し、持寄って一書としたものであろう。二字以上の語の場合、校異箇所の標識として圏点や傍線を施し、まま朱校字が附されている。朱校は、後次或いは別筆か。墨筆による抹消や塗抹もある。尾題は「十巻終」とのみあり。巻末薄様紙に、扉の如く、中央に単辺「続日本後紀　十七之八」と書し、裏に「臣良房等窃惟……」に始まる「続日本後紀序」の初行、「続日本後紀巻第一起天長十年二月尽五月／太政大臣従一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰」の巻頭一丁、明暦戊戌孟陬穀旦　立野春節謹識「書続日本後紀後」二丁の明暦本の摸写計三丁あり。井々堂野紙裏表紙見返部に貼付さる。巻頭に「温故堂文庫」「青山」朱印押捺さる。

本書は、誤字や別体・異体字迄細かに掲げた、続日本後紀の明暦本と「流布ノ板本」即ち寛文板との校異で、「寛政印本同」「寛同」「寛作礼」等と朱書する如く、寛政修本とも校合が為されている。寛文板に就きては、既に本稿(二)で述べた如く、寛文八戊申孟冬穀旦　立野春節識〔跋〕があり、寛政修本は、寛文板が天明八年春焼板となり、僅に残った板木と覆刻によって新彫した板木とを合せ、寛政七年春に印行されたものである。同じく立野春節の校になる刊本続日本紀は明暦三年秋の春節の跋があり、翌る四年の跋を有する続日本後紀の明暦板も、あって不思議はない。しかし、現在刊本は見られぬようである。明

暦・寛文両跋を以て案ずるに、頃坊間に出た続日本紀に校点を加えたので、斯書も同様薦められたが、本朝の古典は蠹魚の害も多く、群籍を集会し同異を参考せねばその完好は得られない。そこで固辞するうちに、自ら朱墨を加えた校本が転写され、書林の得る所となったので否み難く、草々の間に再訂して公刊したということになる。此間丁度十年を要した訳である。

なお、安政四年歳次丁巳孟冬望後一日　江戸後学　山崎知雄謹識の「校訂続日本後紀」凡例によると、該書は寛政七年印本を底本とし、十一種の校異をとっているが、その「二曰塙本。塙検校所蔵、」とあるのが、明暦本であろう。寛文跋の前に明暦跋を掲げ、「此文一篇原无今以／塙本加」と標記されている。此書国会図書館目では、立野春節校と著録さる。

塙氏温故堂では、六国史のうち、それ迄未刊であった日本後紀を校刊している。ハ〇九―四―二一―一

新製水器図説　仙人掌記・水桧記　太田〔全斎〕（方）昭和六年八月写（〔浜野知三郎〕）　大一冊　底本玉井源助氏蔵自筆本

青緑色表紙（二七・五×一九・七糎）双辺刷枠題簽に「新製水器図説」と書さる。扉左肩「新製水器図説　太田全斎著」。巻頭「新製水器図説／太田方　譔」と題署す。前書あって「仙人掌記／仙人掌者挈（トル）水之器也（連合符省略）」に始まり、図説・度法を墨囲し、小字双行に記す。三丁。次に又前書あって「水桧記／水桧者水槖籥也（連合符省略）」と始まり三丁。単辺（二〇・七×一六・〇糎）の烏糸欄を設け、一一行二〇字小字双行に書写さる。訓点送仮名連合符を附し、訂字書入等そのまま写さる。烏糸欄は表裏連接せぬ丁もあり。折山版心部表丁に丁付、また裏丁書脳部下端に通丁付あり。巻末遊紙表に「右新製水器図説太田全斎自筆本玉井源／助氏所蔵也／昭和六年八月写之」の浜野氏書写奥書あり。

仙人掌は「形如蓮藕様（仙人掌名取於此）」とある蓮根状の溝孔を持ち、毛細管現象を利用し、滑車と轆轤を動力に使った井戸水汲上器。水桧は水鉄砲を合成した如き揚水の農具である。水桧器前言に、

古人造二水桧一不レ知二其制一也余構レ意作レ一器（ヲ）以擬レ之費少工省不日（ニ）而成矣凡水器者農家日用之具也……（連合符省略）

とあって、日用経済に力めた儒者の本領が偲ばれる。但し漢文で廻りくどく書かれた本書が、どれだけ農民の実用に供されたかは疑わしい。

本書は未刊で、郷土の先賢の書として、浜野氏が自筆本を書

写したものである。太田全斎既出。ハ〇九—四—二二—一

尚書通存堯典・舜典・大禹謨・皐陶謨・益稷　松田〔東海〕

（長恭）〔自筆〕　中一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二一・〇×一三・三糎）に直に「書通　堯典舜典」と書さる。巻頭「尚書通／日本　平安　松田長恭述」と題署し、尚書孔安国序の通解より始まる。無辺無界八行二一字、字面高約一七・六糎。訓点送仮名連合符句点施さる。切貼や削去訂正が為されている。一八丁。

本書は虞書益稷迄の章名や要語を摘解しつつ、大意を通解通釈せしもので、まま撰者の按語が附されている。

松田（別姓井川）東海は、その伝を詳らかにせぬが、後出（ハ〇九—四—二七—一）孟子通所収「述論語中庸孟子通縁由」によれば、京儒三宅文献に学んだと云う。その説く所は折衷のようであるが、仁斎先生説を引く事多い。文政八年没、享年六十三。ハ〇九—四—二三—一

尚書通　井川〔東海〕（長恭）〔自筆〕　大二冊（仮綴）

本文共紙表紙（二八・二×二〇・二糎）に直に「尚書通上（下）篇」と書さる。巻頭「尚書通／日本　平安　井川長恭述」と題署し、尚書孔安国序の通解に始まること前に同じ。前掲本、尚字の解に次いで、「書契鄭曰」と書契につき鄭玄注を引くに対し、本書、その前に「書正義曰」として、書字の解を施す。無辺無界一一行二〇字、下冊一二行二一字。字面高約二一・五糎、下冊約二一・二糎。僅に句点施さる。切貼胡粉削去訂正あり。誤字の上に正字を書直した所も多い。二箇所ほど「左伝云」等とし、標記書入あり。按語を書せる紙片一葉挿入さる。上下各五二丁。

本書は極さらっとした尚書の通解で、下冊は「族(ママ)葵第七　周書」より。一、二行で終る章も存する。両冊とも、後半は章名等も改行せず、一—数格空きで追込む場合が多い。本巻は前掲書収載部分を全て含み、取上げられる項目も増え、より詳細である。簡単ではあるが、曲りなりにも全巻を存している。従って、一見前掲書の増稿本のように見えるが、果してそう断定してよいかどうか。前掲書は餘りに小部分であり比べにくいが、却って文の通りはよい。また訓点送仮名句点等は完備し、その点では本書よりも詳密である。後掲の孟子通二点も、井川・松田の別姓が各々に題署されているが、松田姓の方が体式は整っている。字体からは殆ど先後の判断はできかねる。今軽々な判断は慎まねばならぬが、伝記資料の出現と、詳細な両書の比較

を俟って、始めて先後関係が明らめられるであろう。八〇九―四―二四―二

春秋左氏通存杜序・隠公・荘公・閔公・文公・宣公・襄公・昭公（十二年迄）　松田〔東海〕（長恭）　〔自筆〕　大五冊（仮綴）

本文共紙表紙（二八・六×二〇・二五糎）に直に「春秋左氏通杜序隠公（隠始め木扁に作り、上から書直さる）」「春秋左氏通荘公并閔公」「春秋左氏通　文公（文始め荘と書きかけ、上から訂正さる）」「春秋左氏伝通　宣公」。第五冊表紙なし。巻頭「春秋左氏通／杜序（第二冊荘公〈閔公〉、第三冊文公、第四冊宣公）　松田長恭著」と題署す。第五冊内題なく「襄公元年大国聘焉杜註……」と始まる。但し第一冊四丁表「左氏通　松田長恭著／隠公」と題し、本文の通解に入る。無辺無界一二行二〇字。字面高約二二・三糎。訓点送仮名連合符句点を附す。第五冊他冊と体式を異にし、殆ど白文、僅に句点を存す。一二行二一字、字面高約二一・四糎。全体に切貼胡粉誤字の上から書直した訂正があり、不審紙が貼らる。附箋一箇所あり。第一冊―一一（うち序の通解三丁）、第二冊―二五（うち荘公二一丁）、第三冊―二五、第四冊―二三、第五冊―一〇丁。第五冊は追込で書かれ、最終丁は一四行書写さる。第三冊に、消息の裏を利用した長尺の一紙、第四冊に一葉の紙片挿入さる。両者後掲の論語通と同一の手にして、本文とは関係なきが如し。長尺の一紙は詩三百や有恥且格・十有五而志于学等論語につきて。紙片一葉は、論語通と行格を等しうし、「従来爾此章古往以来皆不得其解唯（唯字挿入符を以て入れらる）徴近得之」と「孝弟此段一章之結落」を解く。論語徴の謂か。本来論語通に挿入さるべきものであろう。但し論語通では、この箇条、押紙を以て更に詳細に書改められている。

本書は前掲書とほぼ同体式の、要語注と按語を附した極ざっとした春秋左氏伝の通解で、別項に移る場合、ほぼ別行を取っているが、語釈等数格空きで追込まれている箇所もある。当時の微に入り細に亘る博引旁証の集注型とは趣を異にするが、やや物足りないのもまた事実である。

本書には松田姓が識されている。井川・松田の姓の先後を考えるに、本書第五冊の体式は参考になるかも知れない。第五冊は他冊に比し、編成未だ整わず、訓点や句点も殆ど施されぬ白文に近い型である。始めは白文で、稿次を経るに従い、詳しく訓読を施してゆくという編述法が一つ考えられるように思う。

これは前掲尚書通にも、後掲孟子通にも共通して見られる所であって、井川署名のものは句点のみで訓点はなく、松田署名のものには詳細な訓点送仮名が施されている。また井川署名の後掲孟子通に載る「述論語中庸孟子通縁由」も参考になろう。井川長恭は、忖度すれば、まず四書通を作らんとしたのではないか。当時の学人とすれば、それが恐く最も普通であったであろう。四書通を作る前に五経通を、云ってみれば論語通を作る前に春秋左氏通を編述することは、江戸後期の学者としてまずあるまい。勿論決めつけることはできないが、蓋然性は極めて低いと思われる。ハ〇九—四—二五—五

斯道文庫には、他に松田長恭自筆と思われる成公十八年迄所収の一本が存するので、左に附載する。九州の財団法人時代の購入本で、購入の経緯は分らぬながら、浜野文庫に一連の長恭著作が見られることから、市場に出た次掲書をも加え、コレクションを充実せんとしたものであろう。

春秋左氏通存成公　松田〔東海〕（長恭）　〔自筆〕　中一冊

後補茶色表紙（二一・四×一三・六糎）。扉（元本文共紙表紙か）左肩に「左氏通成公」と書さる。通字は始め伝とありしを抹消し、右傍に訂さる。巻頭「春秋左氏通／日本　平安　松田長恭述／成公」と題さる。無辺無界八行一八字内外。字面高約一七・七糎。訓点送仮名を施す。切貼削去誤字の上からの訂字等前掲書に同じ。不審紙あり。三九丁。

成公十八年迄を存し、要語を摘録、別項別行を原則とするも、数格空きで追込む所もある等前掲書と同様同体式である。浜野文庫本と同一の筆者の手になる。シ〇九—四—一六—一

中庸通　井川〔東海〕（長恭）〔自筆〕大一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二七・八×二〇・六糎）中央直に「中庸通全」と書さる。巻頭「中庸通／日本　平安　井川長恭　述」と題さる。無辺無界一二行二一字、字面高約二二・四糎。訓点送仮名連合符句点鉤点訓仮名があり、朱の校字が存する。切貼擦消による訂正や、字面に墨点を打って抹消した箇所、押紙等が見られる。八四丁。

本書は、中庸解題の後、抬頭一格を以て経文を載せ（従って経文行二二字）、章句に基づきて字義と通解とを試みたもので、前掲の尚書通や春秋左氏通と比するに、かなり詳細である。邦

人では伊藤仁斎の中庸発揮、荻生徂徠の中庸解、唐人では鄭玄の注や蔡清の蒙引を引くことが多い。

本書には、眉上に挿入符を附した朱墨の書入が見られる。これは同文字箇所の目移りによる場合が多く、本書を直接認めているのでなく、何かを写しているらしいことが推察される。本書には訓読句読が施されており、或いは前掲書で述べたのと同様な、白文の前稿次本の存在が推定できるかも知れない。八〇九—四—二六—一

孟子通　井川〔東海〕〔長恭〕〔自筆〕　大一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二八・六×二〇・三糎）中央直に「孟子通」と書さる。述論語中庸孟子通縁由四丁を冠せ、巻頭「孟子通／日本平安　井川長恭　述」と題署す。無辺無界一一行二〇字、字面高約二〇・八糎。断句。切貼擦消訂正、眉上挿入符による書入等あり。五一丁。

本書は経文不載。孟子の要語解並びに通釈。趙註・旧説・朱註・程説・仁斎先生古義等を引くことが多い。袁了凡曰等と道家の説も引かれている。内題に次ぎ、前言解題あり、前言に」を附し、追込で「加斉之卿相、……」と公孫丑に入る。梁恵王と滕文公の二篇はなく、尽心篇は前後混乱している。本文中、一・二等段落の入換え符号あり、後掲本ではその通りに直っている。また」で段落を示すが、これも後掲本では改行されている。

本書前附の縁由は、一連の長恭著作に関わり、且つ伝記資料ともなるので、引録しておく。

……於是乎、徂徠先生、高明独得之見、患後世名物紊乱、其明古言、審古辞、正名辨物、一洗唐宋已降数百年諸儒陋習、其功又偉矣、……其為不徴古言而不信聖人也、孰甚焉、其餘観道徳之分、直如水火、不可相容爾等之繆、殆不暇枚挙而指数矣、仁斎先生、徳行君子、卓識辨論、厭性理之学、称述古義、而有功於聖門者、為不少焉、然徳行学問混為一、其他之誤、亦不為不多焉、如程朱諸先生、以豪傑之材、聖賢之学、為百世儒家之宗、後学因其言、以得尚志於古人、為己之学、而従事於居敬窮理之功也、誰不服其教訓、被其徳沢者也与、則固当奉遺訓、不敢失墜、然其間、豈無一疵之可議、而一失之可斥者也耶、今験以古義学則二辨論語徴之類、還求諸章句集註也程朱之誤、有正如彼之所指擿、不可復得而掩焉、亦安得有所廻護諱避、以不敢言其非、而倣彼顓門諸儒所為焉爾乎、且程朱諸先生、生絶学数千載之後、悼道之不明乎、……後学奉遺訓者、宜以先賢之心、為心、

其於諸家是則取之、非則捨之、直公之天下、而無容一毫私意於其間、取捨辨析、必得義理至当、而后止焉、庶其不失先賢之心、而世教亦有裨補而已矣、今之為程朱者、不知出玆、以先王公天下之道、為一家私物、立異分党、迭為仇讎、聚訟競辨、至死不暁、道之為裂、非夫、先師三宅文献先生、憂為有所論著、惜哉、論著不至半而没、長恭幸汚於末弟席、狂愚不肖、乃妄不自量、其是也乎、其非也乎、俟後君子云爾、

ハ〇九―四―二七―一

孟子通　松田〔東海〕（長恭）〔自筆〕　大一冊（仮綴）

本文共紙表紙（二七・五×二〇・二糎）直に「孟子通全」と書さる。巻頭「孟子通／日本　平安　松田長恭　述」と題し前言解題二丁あり、葉を改め「孟子通／日本　平安　松田長恭述／梁恵王篇」と本文に入る。前掲書は、前言解題・本文接続し、丁を改めず。無辺無界一二行二〇字、字面高約二二・〇糎。訓点送仮名連合符句点を附す。切貼擦抹訂正押紙不審紙あり。五一丁。

全文に訓読が為され、前掲書の前後錯綜せし箇所も整斉、前者になかった二篇を含み、篇名も加えられ、全体に体裁が整ってきている。前掲書と比べ、幾らかの違いがあり、これは増補改訂と見てよいように思う。追込で書写し、擦消した所があり、何らかの底本の存在が窺われる。

滕文公篇は七行のみ。巻末に公孫丑「不仁不智、無礼無義、……」、尽心下「楽正子二之中四之下也……」（後者白文）の二項が追加されている。ハ〇九―四―二八―一

論語通存学而―雍也・子路・憲問篇　井川〔東海〕（長恭）〔自筆〕　半七冊

本文共紙表紙（二四・七×一七・五糎）中央直に「論語通学而篇」と書し、その左に「井川長恭稿本／共十四冊」と朱書さる。共に浜野氏の筆ならむ。仮綴の裏表紙を表に廻し、包背装の如くす。第二冊表紙中央直に「論語通為政篇」と書さる。浜野氏筆の如し。元表紙一葉残存、中央に「論語通為政」と題さる。第三冊以下、元表紙中央直に「論語通八佾篇（里仁篇・公冶長篇・雍也篇）」と外題。第七冊仮綴、やや小ぶり（二三・九×一七・一糎）、書名なく「子路篇／憲問篇」と小題するのみ。巻頭「論語通　日本　平安　井川長恭述」と題し、前書解題七丁あり、「学而篇」等小題して通解に入る（里仁篇小題なし）。但し雍也・子路の二篇は「論語通　雍也篇　日本平安　井川長恭述」

「論語通／子路篇」と題署さる。憲問篇、小題のみ。無辺無界一一行二〇字、極僅に小字双行。字面高約二一・一糎。断句。第七冊は朱句点を附す。但し末一一丁ほどには施されず。第三冊第七丁表迄一二行二五字に書写さる、字面高約二〇・一糎。朱墨の校字訂正抹消挿入等の指定や押紙不審紙、また袋中に挟込まれた紙片等多く、特に第四冊以後に目立つ。朱墨鉤点あり。第一冊三六、第二冊三一（五葉袋の中に挟込まる。本葉は、為政篇の第一・二並びに末三丁分計五葉で、行格も同じい）、第三冊六二、第四冊五七、第五冊五四、第六冊五〇、第七冊四三（うち憲問篇二六）丁。第三・四冊に水汚あり、第四冊以下虫損太し。表紙に「浜／野」朱印鈴せらる。

本書は、論語の経文を、抬頭一格二〇字、注一九字を以て摘録、要語釈と通解を試みたもので、朱註中心ではあるが、皇侃・柳宗元・程子、邦人では徂徠・仁斎・春台・明霞等を引くことが多い。「　」を附して「出所可考」と標記したり、「以下欠考」とあったり、「此章合前章為一章」とある等未整未定の感が深い。朱墨訂字書入や指定挿入の標記の多いことも、それを語っていよう。本文の体式また斉一を欠く。

本書第二冊に挿込まれた五葉は、長恭写本の楽屋裏を覗かせるかも知れない。未完の稿本をもとに稿次を辿って精製してゆく江戸学人の風が、一連の長恭写本にも、また見られるのではないか。（追記一）

以上八種、精粗はあるが全て同筆同体式の写本で、書写の情況から見て、自筆稿本と認めてよいように思う。中で、本「論語通」が最も丁寧に書かれ、一見別筆の如くである。ハ〇九―四―二九―七

岡本況𡸁翁数雅抜鈔　森梫庭（約之）抜鈔　近写（〔浜野知三郎〕）　半一冊　慶応二年一月森梫庭抜鈔本

茶色布目表紙（二三・七×一六・三糎）双辺刷枠題簽に「数雅抜鈔　単」と書さる。罫紙一丁を遊紙とし、巻頭「岡本況𡸁翁数雅抜鈔／慶応二年丙寅正月抜鈔森約之以礼父養真」と題署、「一日一夜合為一日　荘十八谷梁注引鄭玄／一絃琴　北辺随筆一　日本後紀八　延暦十八年七月」と始まる。双辺（一八・八五×一二・五糎）有界一二行、裏丁匡郭外下端に「松屋製」とある白口単黒魚尾藍刷罫紙使用。行二四字ほど、小字双行。朱校字、朱墨塗抹訂正あり。標注書入れらる。五三丁。五四丁表「慶応二年丙寅正月十八日四更鐙下抜鈔了／森約之以礼父梫庭拙者」の原識語あり。

本書は、岡本況斎の編になる「数雅」を、梶庭が抜鈔したもの。一から始まって、数を用いた言葉や名数を、五十七倶胝六十百千歳まで書抜いている。各数字毎に別丁とし、末に「約之案」として案語を加えた箇所がある。

「数雅」は、本稿(一)に略解した杉原心斎の同名書があるが、類書であり、体式も異る。両者親交はあったものの、そこからの抜鈔ではなく、況斎の同名の編述書からである。出典は漢籍が多いが、仏書や和書も含まれている。自筆本半六冊が尊経閣文庫に存する。ハ〇九—四—三〇—一

七夕考 〔跡部〕光海 近写（〔浜野知三郎〕） 大一冊

紫色絹表紙（二六・六×一九・〇五糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「七夕考」と書さる。巻頭「七夕考／神代巻曰伊弉諾尊……」と始まる。無辺無界九行一九字内外小字双行。字面高約二〇・五糎。訓点送仮名連合符訓仮名を附す。末に「正徳壬辰七月日 光海翁識」と書し、「天保十一年子十月廿三日神戸氏以書写之／蜂屋正敏」の元奥書あり。二三丁、次に浜野氏の、撰者・書写者に関する覚一丁あり。

跡部光海大人名は良顕にて通称は宮内なり……其著書は……四十餘種あり

享保十四年正月廿七日年七十一歳にして歿す墓は青山梅窓院にありといふ

蜂屋正敏は幕府新御番与頭高三百俵蜂屋甚之助悴にして俗称を半次郎といふ小野斎宮重浪（二百俵大御番を勤む）門人なり……半次郎子二人あり長を仙之助正忠次を豊次郎といふ父の学を継で国学 物産等に委し……仙之助豊次郎は今音羽町五丁目桂林寺東町に住す蔵書瓊矛文庫の押印あり

本書は、神代巻拾遺・同言餘鈔・倭姫世記・同節解・公事根源・日本歳時記・八雲御抄・万葉・古今・本朝文粋・本朝一人一首・続古今以下各種の和歌集より、七夕歌を輯め、考証したもので、編述の意図は、光海の考証に詳かである。

右二書ヲ考ルニ公事根源ハ一条ノ太閤藤原兼良公ノ作也博識ニテ和漢ノ書ニ達シ神道モ学ヒテ神代巻纂疏ヲ著サレタル人也然ニ異国ノ古事ノミヲ引用テ書出サレタルハ如何ナル意ソヤハカリ難キヿ也疑アルヿ也歳時記ハ貝原篤信カ作也是モ和漢ノ書博識ナル者也コトニ我国ノ古事来歴ヲ考出シ精力ヲ尽シ品々益ナル書多シ然ニ如是七夕ノ事甚謗テ書タルハ何事ソヤ其上万葉集ノ歌一首書載タリ人丸ノ歌ニ神代ヨリ七夕ニ証アル歌多シ此ヲ書出サヾルハ何ノ意ソヤ何

レモ異国ノ書ニ僻ノ我国ヲ尊フ心暗ミテ自ラ如此ナルユヱナルヘシ予是ヲ憂ヘ考ル所ヲ抄書ノ一冊トナセリ　夫陰陽和合ハ天ナリ夫婦和合ハ人ナリ天人唯一ノ道ニメ其理隔ナシ陰陽ヲ捨テ天道ナシ夫婦ヲ捨テ人道ナシ是道ノ根本也…

跡部光海は幕臣にして崎門の神道家。絅斎との師弟答問や、講義筆記の類も存する。ハ〇九―四―三一―一

竹窓文稿（題簽）　窪木竹窓（清淵）　昭和六年九月写（〔浜野知三郎〕）　半一冊（ペン書）

茶色表紙（二五・三×一七・三糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「竹窓文稿」と墨書。野紙一丁を遊紙とし、以下ペン書にて「竹窓文稿／目次」三丁。巻頭初四行空格にて「孝経孔伝訓解序」と小題し、本文に入る。双辺（一九・六×一三・九糎）有界一〇行二〇字、裏丁匡郭外下端に「神田高柳特製」、欄脚部に「10×20」と横書する白口単黒魚尾藍刷原稿用紙使用。白文。全丁表第一行と裏最終行とは、書写せず空格とす。インク消使用さる。六六丁。次に浜野氏書写奥書一丁あり。「昭和六年九月四日午後第九時写了於東都郊／外練馬町新居　穆如山荘主人『知／印』（陰刻朱印）／（隔一行）／原本九行行二十字藍野有格縦六寸三分横／四寸板心刻息耕堂蔵書五字息耕未詳何人／書斎」と。裏表紙前野紙一丁を遊紙とす。異った万年筆を使用し別筆に見える所もあるが、一手としてよきか。

本書は、下総香取の産、水戸藩儒臣、窪木竹窓の文稿で、息耕堂は竹窓の堂号。息耕堂では、整版のみならず、木活本も刊行されている。本書には「送伊能子斉赴蝦夷序」「贈伊能子斉赴蝦夷序」「造大日本沿海輿地全図序代伊能忠敬」「与人請書画詩賦書代伊能敬慎」等の、同じ下総出身の測量地図家伊能忠敬との親交を示す作や、「復〔水藩〕小宮山公書」「答（或いは復）水藩岡野執事書」等水戸藩での関係を示す作物も多い。

巻末に誌された、浜野氏による底本の書誌学的な記述は貴重である。こうした記載は唐人の間では、宋元版の鑑識等に最も肝要であり、蔵書家校勘学者の間に題跋という形で定着を見たが、日本では幕末校勘学者によって僅かに行われたのみで、もう一つ盛んにはならなかった。浜野氏のデータ記述も、その写本の全てに為されている訳ではない。これがあれば、浜野氏写本の貴重性は更に増したに違いなく、まことに惜しまれる。

窪木竹窓、文政一二年没、享年六十八。ハ〇九―四―三二―一

佐藤先生冬至文附録　〔稲葉黙斎〕（信）　近写（〔浜野

知三郎）　大一冊

代赭色表紙（二七・三×一九・三糎）双辺刷枠題簽に「冬至文坿录」と篆体で書さる。巻頭「佐藤先生冬至文附録／凡七道」と題して本文に入る。無辺無界一〇行二〇字小字双行。片仮名交り文。字面高約二〇・〇糎。巻末低二格を以て「予今春有感表章冬至文此冬此日遂為／諸生講之既而摭取発揮遺文者凡七道／為附録以欲与同志共之十一月既望信／識」の稲葉默斎（正信）跋あり。全一九丁。

本書は佐藤直方が、享保元年冬至の日、門下の三傑、稲葉迂斎・野田剛斎・永井隠求に書識した道学を志す者の大綱指針「冬至文」を、負託された三者（隠求は病床にあれば、迂斎代筆）の言共々、迂斎男、稲葉默斎が表章し、天明六年に講じた折の默斎表章附録七道を写したもの。因みに冬至文は天保五年に刊行されているが、附録は未刊である。直方の学派では、毎年冬至の日に冬至文を講じた。默斎の父迂斎に学んだ新発田藩主溝口浩軒の影響で、新発田藩では冬至文が盛んに講ぜられ、書写も為されている。

本書は第二道より、文頭に○を打って書写さる。「一本大義ヲアラワシテ」等他本との校合も見られる。崎門の学者は、述べて作らず、書物を公刊すること少かったので、学徒は各記録者の講義ノートを参釈し、講義録を整備する事が多かった。

稲葉默斎、寛政一一年没、享年六十八。八〇九—四—三三—一

読易私説（目首）　伊藤東涯（長胤）　近写（浜野知三郎）　大一冊

縹色空押唐草雷文表紙（二六・七×一八・〇糎）外題なし。「論易之起／……／論乾之九三／附／復見天地之心説／十翼非孔子之作辨／用九用六説又名著卦辨疑」とある「読易私説目録／東涯先生著」二丁を冠せ、巻頭「論重卦」と小題し、本文に入る。単辺（二〇・四×一三・四糎）有界九行白口墨刷野紙使用。版心表丁下端に丁付あり。第六五丁、単辺（二〇・二×一三・六糎）無界白口単黒魚尾墨刷野紙使用。単黒魚尾下、表丁に「巻」と刻さる。各項毎に改丁し、行一八字、朱句点校字朱引あり。附載の「用九用六説」末に「元禄庚辰臘月十七日、京兆／伊藤長胤原臧甫識、」語あり。全六五丁。但し又十三・十四・又四十（五丁分）・又四十四・四十五の各丁は白紙で、欠文となっている（欠文箇所も項目は目録中に載る）。なお又十四・又四十五の二丁には本文を書写してある。易の卦は印文を押捺

して用いる。

本書は易の東涯説で、目録と本文やや錯綜し、序次の異るもあれば、項目名の繁簡合せざるも多い。未だ編斉整わざる稿本を書写し、従って欠文箇所も生じたものかと思う。巻末第六五丁一丁は、旧説と本説とを対照表記あり、後附としている。

今参考のため、目録にありて本文に欠佚を生じた項目を挙げれば、「論易之起（初）」「論易之為教（又十三丁）」「論易学伝授之由（十四丁）」第三十四、三十五丁の間に来るべき「論先天後天」「論伝注之異同」の五項である。また序次の違いを挙げれば、目録では「論大象之凡例」（本文第二七丁）と「論易逆数」（同第二八丁）の間に挟る「論爻挙古人之名」が、本文では第十丁に繰上り、「論孔子以義理説易」第一一丁の前にある。しかし、この「論孔子……」が、目録では本文第一二丁「論聖人用卜筮之意」と前後しているといった按配である。

本書に附された「復見天地之心説」末には、「元禄癸未之歳伊藤長胤撰」の年紀が見え、本文末の識語元禄一三年より三年遅い。

本書の、息東所手校本、東里写本が、仁斎以来の家学書と共に天理図書館古義堂文庫に遺蔵されている。欠条は本書と同様である。

伊藤東涯、仁斎長子、父の意と業とをよく継ぎ、紹述先生と私謚さる。元文元年没、享年六十七。浜野知三郎氏に「伊藤東涯に就いて」（斯文第一八編第一二号）の述作あり、その元原稿たる講演筆記録一冊が、貴重書として、浜野文庫に保存されている。ハ〇九—四—三四—一

〔度量井田考〕附吉田某追考　〔中井履軒〕（附）吉田某　近写（〔浜野知三郎〕）　大一冊

縹色布目表紙（二六・六×一八・四糎）双辺刷枠題簽に「度量并井田等之図中井履軒著」と書さる。巻頭「経界図」と題し、「周尺今ノ鉄尺七寸二分ニアタル周ヨリ以前ミナ同シ」と注記し、歩と畝を四角く囲み、「周尺六尺ヲ歩トス」「鉄尺ノ四尺三寸二分四方」。「歩百ヲ／畝トス」「方四十三尺二寸」等と図会す。七丁表迄。うち、周尺・夏貢・殷助・井・周徹・井・五畝宅・里等を図会する事四丁。以下考証。無辺無界一〇或は一一行字数不等。字面高約一九・四糎。第七丁裏から八丁表にかけ「吉田某追考」を附す。

諸家により、種々考証の存する度量・井田の中井履軒図説に、吉田某の駁文を併せ一書としたもの。履軒の説に

礼記王制ニ古者以周尺八尺為歩トイヘリ諸儒多ク此ニヨレ

リ然ニ歩ハ元人ノ両足ノアユミヨリ起リタル数ナリ周ノ八尺ハ今ノ五尺七寸六分ニ当レバアマリ長スキタリ路程ノ数モアハヌヿ多シ又田ノ広狭モ百畝ノ田舎ノ二町半餘ニアタレハ一人前ニハアマリ広スキタリイカサマ謬語アリトミヘタリ司馬法ニ六尺為歩ノ文アリコレニテハ人歩大小ノ中ヲ得テ田ノ広狭モ路程ノ長短モヨキ程ニ見ユレハ正説トスヘシ

吉田某追考に曰く、

公田百畝中以二十畝為廬舎（餘八十畝）一夫所耕公田十畝通私田百畝合一百一十畝十一分而取其一蓋又怪於什一矣

按履軒先生井田之図ニ云二十四家為里長七十二間トス此レハ井田ヨリノ積リ故ケ様ニナルナリ今井田ニアツカラス郷遂貢法ヲ用テ十夫有ト云ヘハ此図如クナランカ貢法ハ井田ナリ一夫百畝ノ田ヲ受年貢豊凶ニカヽワラス定リ有ル故ニ上ノ所取常均而下苦楽差アルナリ

こうした不公平を除くために、田畠の年による付け換えや、網度の日繰り漁を行なった所もある。

中井履軒、懐徳書院を開いた甃庵の次男にして竹山の弟。文化一四年没、享年八十六。ハ〇九—四—三五—一

日記異名　近写（〔浜野知三郎〕）　半一冊

艶出し黄土色表紙（二四・七×一七・三糎）双辺刷枠題簽に「日記異名」と書さる。巻頭「日記異名」と題す。無辺無界九行、上段に書名、下段に著者名を記す。眉上に朱筆にて増補標記し、本文中にも朱筆増補書入あり。朱墨藍にて巻数著者等に注記を加う。第十四丁裏から十五丁表にかけ「〇記者不知」と題し、「天慶二年記　一巻」より「文明七年八年十年記　一巻」迄、撰者未詳の記を載す。十五丁裏「諸家日記異名少々自本有類／象（ママ）而漏脱頗不少候間余今度／増補為便覧以仮名所立次第／之猶可進加者也／天明元年十二月上旬／正二位紀光」。十六丁表「以主殿助伴重賢本令宗頌書写之／于旹文化八年二月廿五日也（花押）／右以中臣延秋新写之本又令書写者也／同年三月十三日　橘堯邦（花押）」の元奥書が存する。本文一四丁。総裏打、原料紙高約二三・三糎。巻頭に「浜／野」朱印鈐せらる。

本書はイロハ別に纒められた、云わばイロハ引日記名寄せで、大約書名巻数撰者を載せ、奥書にも見らるる如く、書継がれ増補されていったものであろう。巻頭のイの部も、始め「一止御記　藤原隆康卿（但し朱筆にて御に抹消符〇を打ち、イチシと振仮名）」のみであったものが、前後に朱筆にて「猪熊関白記

藤原家実公」「家光卿記」と附加され、眉上には同じく朱筆で「今出川相国記　公相公」と標記されている。（追記二）

奥書に見える正二位紀光、柳原氏。寛政九年永蟄居、八月十日五十二にして落飾、法名暁寂。寛政十二年蟄居を許され、翌日薨。享年五十五。伴重賢には、文政九年に成った「伴略譜」の編著がある。橘堯邦或は今大路氏か。八〇九―四―三六―一

日本書紀私記　大正四年二月写（浜野知三郎）　大一冊

底本清水浜臣旧蔵〔伴〕信友校合書入本

茶色刷毛目格子文様表紙（二六・七五×一九・二糎）双辺刷枠題簽に「日本書紀私記　完」と書さる。扉左肩「日本書紀私記」と題し、遊紙表に「清水浜／臣蔵書」、裏に「泊洒舎蔵」二朱印を摸写す。巻頭「㊀日本書紀私記　中巻　(第)(一)(神)(代)(上)」と題し、中・(第)の右肩イと異本表記し、イの横に藍点を打つ。(第)右肩にも藍点あり。なお、内題の前に、上下に○を打ち、直線で繋ぎ、「此二行不分イナシ」と書かれた注記が存する。無辺無界一〇行字数不等小字双行。字面高約一八・六糎。各種符号を附し、眉上に異本注記を為すこと詳密。藍点を以て異本注記箇所示さる。表丁折山版心部に「神代（―応神紀）」と小題あり。「日本書紀第一終（日本の上左右を傍線で囲み、上部に藍点。左に連接線を引き、「イナシ」と表示。イナ左傍に藍点）」「日本書紀私記[十]終（[十]の上下に藍点。右傍「上巻」と注記し、上右肩に藍点）」等と尾題あり。各巻頭巻末の題署を、繁雑ではあるが、本書の成立を知る所縁ともなるので、左に掲げる。

㊁［日本書紀私紀］イナシ［第二神代上］イナシ

㊂［日本書紀私記　第三神代三］イナシ

㊃日本書紀私紀[第四]下巻（下の右肩に「イ」）

㊄［日本書紀私記第五］イナシ

㊅［日本書紀私記第六］（日本の右傍に「イナシ」）

㊆［日本書紀私記第七］（同前）

㊇［日本書紀私記第八］（同前）

㊈日本書紀私記第九　人代一

㊉［日本書紀私記第十一］

○日本書紀[私記]第(十)(四)(三)（私記右肩に「巻」）　本紀二

○［日本書紀私紀第十四］

○［日本書紀私記第十二］［天皇第六］

○［○本紀○○第五　・天皇第十］㋐（眉上に「㋐日本書紀巻第五」と書入らる）

○[本紀第六](卅)（眉上に「(卅)日本書紀巻／第六」と書入ら

る）

㊐日本書紀私記巻第七（巻は挿入線を以て書入らる。挿入線に藍点）　［▲皇帝十二代●景行天皇］

㊑［日本紀私記第十五成務］稚足彦天皇（稚足彦挿入符を以て書され、挿入線上に藍点）日和加太良之比古

○日本書紀私記（私記右傍に「巻第八」）・［天皇第十四▲仲哀天皇］

○日本書紀私記（私記右傍に「巻第九」）・［天皇第十五▲神功皇后

㊒日本書紀巻第十［・皇帝十六代▲応神天皇］

尾題は、

［日本書紀私記第二終］イナシ

日本書紀私記第三終（第三終右傍に「イ中巻終」）◎

［日本書紀私記第四終］イナシ

［日本書紀私記第五終］（日本右傍に「イナシ」）

［日本書紀私記第六終］（同右）

［日本書紀私記第七終］（同右）

日本書紀私記第八終（第八終の右傍、「イ下巻大尾」）

［日本書紀私記第九終］

［日本書紀私記第十一終］

［日本書紀私記第十三終］

［日本書紀私記第十四終］

以下尾題なく、内題㊐巻第七皇帝十二代景行天皇の箇条に対応して、

［日本紀私記第十二終］

とあり。全て［　］□の上下に藍点が打たれ、傍点また藍筆。本文三八丁、但し第二丁裏三丁表白紙。

巻末に、第八尾題後「コノ次ニ于時応永三十五年云々ト奥書アリ末ニ△印ノ処ニ写ス」とある元奥書書写さる。「十八丁ウ／イ△印ノ処可見合／日本書紀私記下巻大尾／トアリテ奥ニ」と注記し、

于時応永三十五年戊申正月十五日午時上中下三巻終写功了上巻者日本紀三十巻待統（マヽ）天皇マデノ註也中下二巻者神代両巻ノ註者也於ニ此本ニ者平野神主之家ヨリ外ニ他家不レ可レ有本也可レ秘々々云々

同二月二十一日ニ朱点校畢　髪長吉叟生年八十一歳書之（年紀右肩に「朱書」とあり）

次いで、

長吉翁ノ奥書ニ上巻者日本記三十巻四十一代持統天皇迄ノ註也ト云ヘリ然レ𪜈此私記神武天皇ヨリ応神天皇迄十六代ヲ註セル者也仁徳天皇ヨリ　持統天皇迄二十五代私記ナシ此ノ註セル私記脱落シテ不伝ニハ非ス私記ハ古本ヨリ伝ル処元ヨリ三巻也二十五代ノ私記アラバ巻数多カルベシ初代ヨリ十六代而已ニシテ二十五代ヲ私記セザル妄惜ムベシ

翁之朱点ノマニ〳〵大字ニハ朱点ヲ大丸ニシ小字秘訓ニハ朱点ヲ小丸ニシテ見分安カラシムル者也矣（眉上に朱点凡例）

此私記三巻者古来ヨリ日本書紀ニ副テ相伝ル記ニシテ一品舎人親王ノ撰録シタマヘル真本ノ古伝秘訓ヲ全ク秘記セル者也矣伏乞八十連属之後裔ニ伝テ慎而勿失吾誠ニ神助ノ冥加ニテ伝来ノ真秘本ヲ以テ敬写ス深ク文庫ノ底ニ厳秘スベシ

于時宝暦六丙子閏十一月朔日　内握覆翁

一丁あり。傍点藍筆。次に、

右一編丘岬俊平所レ蔵也錯雑衍誤（次序）（衍誤朱で囲まる）不一而足ニ再三考訂浄写成レ功猶未レ免レ有ニ訛謬ニ而不ニ敢妄改ニ且原訓仮字之違者則一依レ旧元本傍書有レ標ニ愚直堂按ニ者愚直堂者……之別号然レ則原出ニ于……之手ニ乎其考説無ニ可レ取者ニ今尽省レ之抑此編所レ伝之訓多乖ニ古意ニ雖レ不レ足レ為ニ確拠ニ而亦非ニ輓近之書ニ固多ニ可レ観者ニ珍重之餘手自繕写以為ニ考証ニ云

（於是就書紀加其レ𪜈）（衍誤則）

本編既卒レ業未ニ数日ニ復得ニ　本藩安倍氏所レ伝本ニ其末曰・―比ニ之丘岬本ニ頗少無ニ謬誤ニ善本也然至ニ其仮字ニ則亦猶乖違蓋原訓既誤乎抑係ニ後人之伝写ニ乎今不レ可レ知也乃以ニ藍錠ニ一〻旁ニ書之ニ無ニ毫所レ遺因再題ニ其後ニ（傍記傍点朱書）

の伴信友校合識語一丁あり。遊紙表に「右日本書紀私記以清水浜臣旧蔵本写之／大正四年二月廿五日　浜野知三郎記」の書写奥書が存する。愚直堂校本は、沢田一斎写本が小浜市立図書館に遺存する。

本書は、神代より応神紀迄の要語の訓解で、恐らく元は講筵の注記や、裏書・傍記等から輯集したものであろう。私記の巻数や書紀原本の巻数表記が混雑し、その上異本との校合が為されており甚だ輻輳している。第九尾題と第十一首題の間に、挿入線を以て「二十七ノ頭ニコノ間ノ落丁ノ分シルス」と墨書し、朱丸を打ち「信友云」と挿入して「神武紀今本ヲ以テ校ルニ此間六枚ト凡二十四行バカリ欠タリ十之巻缺タルナルベシ」と朱

書されている。信友の書入は第一三丁表第四下巻の途中以後に始まり、朱書されている。

挿入紙に

本云

応永卅五年戊申正月十日以申尅書写畢

髪髻叟生年八十一歳

安永八己亥年二月廿三日　寅写畢

の大槻本の奥書書写さる。

なお、本稿(一)で略解した「日本紀私記提要」の項を参看されると、本書の奥書とも関連し、分り易い。私記は、甲乙丙丁の四種が、「新訂増補国史大系」第八巻に集成され、応永三五年の所謂る御巫本の巻頭・巻末が、玻璃版によって掲出されている。

伴信友既出。ハ〇九―四―三七―一

祝詞辞引五十音順　近写　半一冊

素表紙（二四・四×一七・〇糎）左に「積々斎雑記　教部完」、中央に「祝詞字引」と墨書。右大字朱書にて「教部」と分類、全て直書。背部を貼合せ包背装の如くす。扉野紙中央に「祝詞辞引五十音順」と題し、裏に「五節句／正月七日（ムツキノナヌカ）　三月三日（ヤヨヒノミカ）……／月日読方／正月元日二日三日（ガンジユツフツカミカ）……」等と記さる。巻頭「あ部／あかにのほに　赤丹穂爾。かほのあかくなるまでに祝詞式／（長御食乃遠御食登赤丹穂爾聞食故丹（ナガミケノトホミケトアカニノホニキコシメスユエニ））」と始まる。単辺（一九・六×一二・八糎）有界一〇行二五字、上象鼻白口下象鼻黒口の藍刷原稿用紙使用。切貼傍線あり。い部のみ項目二行取り。後前と標記し、入換えを指示する箇所が、「あまつのりと」「あまつつみ」等三箇所ほどある。裏表紙前野紙一丁を遊紙とす。本文一五丁。巻頭に「風舄」「岸本／臧書」朱印押捺さる。

祝詞に見える要語の五十音順の辞引で、全て意味と出典とを記している。

積々斎については、今知る所がない。ハ〇九―四―三八―一

莫伝抄　大正四年五月写（浜野知三郎）　半一冊

濃縹色布目表紙（二三・六×一六・二糎）双辺刷枠題簽に「莫伝抄　完」と書さる。扉左肩「莫伝抄」。巻頭「莫伝抄」と題し、「加賀御草　正月一日大内餅の上に置大根也／ふき草の中にもはやきかゝみ草やかて御調にそなへつる哉」と始まる。無辺無界七―九行、字面高約二〇・〇糎。第九丁表迄九行、裏より八行に書写されることが多い。巻末「暮古月　親子月十二月／この花のいまや咲らむ難波かたくれこの月の比になりつゝ

／我人のみたまをまつるおやこ月松やいのちのためし／なるらむ／慶安元年六月書之／万葉集草木幷十二月吳名集莫伝抄終」。次に「右一巻以和歌古語深秘抄本写之／大正四年五月十二日浜野知三郎」の書写奥書あり、変体仮名に違いはあるものの、恵藤一雄編の、元禄一五年一月刊「和歌古語深秘抄」の転写のようである。末に双辺（一九・七×一三・一糎）有界一二行、裏丁匡郭外下端に「12　海雲堂」とある白口単黒魚尾藍刷罫紙二丁を用い、補遺あり。「○川高草ノ次（春）／川古草も／下水に月やすまゝし川こ草かりそめの間も波のたゝすは」等本篇に漏れたるを載せ、「秋遅草萩欠（秋部ニ出ツ）」等、本篇と異る排列のものを注記す。本文一七丁。

本書は、主に草木や十二ヶ月、季節に関わる異名を持つ歌語を取上げ、例歌を引き解を附したもの。春のみは小題せず、夏（秋・冬・雑）部にわたって排され、十二月異名が附されている。八〇九—四—三九—一

秘抄（文鳳抄）一〇巻（巻一後半・巻二首、後半・七欠）〔菅原為長〕　写（〔浜野知三郎〕）　大四冊　薄様紙　影

弘安元年五月写本系

海松色表紙（二七・一×一八・一糎）双辺刷枠題簽に「秘抄一三　花（四　鳥・五六　風・八九十　月）」と書さる。扉左肩「秘鈔第一」、第二冊「文鳳鈔第四」、第三冊「文鳳抄第五人部」、第四冊「文鳳抄第八草樹部」とあり。また、第一冊中扉「文鳳抄第三地儀部」、第四冊同「文鳳抄第九鳥獣部方角部魚虫部光彩部」が存する。巻頭「秘抄第一（三—十）」「秘鈔第四」等と題し、目録を挿んで本文に入る。第一冊追込、第二冊より目録別丁、第四—三、第五・六・八・十各一丁。第九は二丁表迄、裏より本文。無辺無界七行字数不等小字双行、字面高約二〇・〇糎、片仮名は殆ど小書さる。第二冊のみ訓点送仮名訓仮名連合符、異本との校合注、朱声点あり。五行書、字面高約一八・〇糎。書写底本、或いは他巻と別なるか。第十略韻上下の後「同訓平他字以イロハ為次第」八丁あり（墨声点を附す）、裏に「弘安元年五月之比一部書写早」の元奥書が存する。第一冊第一—二五（但し、実は第一六丁より、巻二「三月尽」以下が混入）、第三—四四丁。第二冊本文八一丁。第三冊本文第五—三八、第六—二九丁。第四冊第八本文—二三、第九目共二四、第十本文二〇丁。但し、第九光彩部の最終二丁は、十丁前の魚虫部の初めにあるべきもの。また第六第三丁に当る部分が佚しているらしい。（追記三）

本書は、秘抄或いは文鳳抄の名で伝えられた詩文作成の金科

玉条たる類書で、完存する伝本は知られず、本帙には第一天象前半、〔第二歳時〕の一部、第三地儀、第四居処、第五人、第六神仙・釈教・文・音楽・飲食、第八草樹、第九鳥獣・魚虫・方角・光彩、第十略韻の各部が存する。本書には鉤字や、虫損部をそのまま写した形跡があり影写と思われる。

なお、本帙には尾崎康・松本隆信両氏が、欠佚部分を翻字に依って補った原稿巻一―二五、巻二―一四補二（皇化・此〈北〉辰・三皇所収）枚が附され、影写の不明瞭な文字を鉛筆書にて補記している。これは本書の最古写本である真福寺蔵弘安元年本に依るとのことである。真福寺本は、今第四・七の二巻を佚するが、図録で比するに本影写本と合致する。該本は古来名物で、内閣文庫等摸写本も多く、本書の底本もそうしたものの一であろう。昭和五六年、真福寺本を底本に、宮内庁書陵部の所謂る鷹司本と、中田祝夫氏蔵本とを以て対校影印した「真福寺本文鳳鈔」が、大東文化大学東洋研究所から刊行されている。

本書には撰者名を題さぬものの、菅原為長の編と見られ、同工の編著に「管蠡抄」がある。寛元四年没、享年八十九。八〇九―四〇―四

必読書目　門田〔朴斎〕（鄰）　慶応元年閏五月序写（自筆）　半一冊

後補小豆色表紙（二四・二×一六・五糎）双辺刷枠題簽に「必読書目門田朴斎著」と書さる。末に「右三条於為学之法似得要領固鈔／出示於同志之諸君／慶応紀元閏五月初七／六十九翁門田鄰」と署する序二条（薛文清・胡敬斎の言。一条欠けしか）一丁。続いて扉「必読書目」。次に口絵の如く、三礼から三大全に至る経書の名数等を表示、一丁。巻頭題署なく、「大学章句或問語類注本大全／論語集注精義或問語類注本大全／孟子如論語」と本文に入る。一二行。本文六丁あり、遊紙一丁をおいて、裏丁「少年は老やすく学は成かたし／一寸の光陰をもかろくおもひて／ついやすへからす過しあとのはか／なさは是非なし行末には心を／つくへしなかれみなもとへかへらす／後悔さきに立事なし」と、学を志す若人用の諺を載せ、「さきたゝぬくひのやちたひ／かなしきはわかるゝ水の／帰りこぬなり」と書さる。「〇素読／四書　唐詩選／古文　五経／文選／以上」と素読すべき書名を挙げ、裏丁「小学　唐詩選　三体詩　四書」等書目一丁と、五子・十七史・廿二史等名数解・書目、四丁。前附名数表に「渡辺／氏」朱印押捺さる。三田定則「漢字の害を説く」、樋畑雪湖著「日本郵便切手史論」の書評（昭和五年八月

廿一日・二十三日の東京朝日等か）新聞切抜挟込まる。

本書は、経史（国史を含む）子集（程朱王陽明等と本邦儒家の著作を含む）老荘儒等諸家（儒家文集を含む）の、学に志す者の必読書を掲げたもので、第五丁裏からは、春秋・左伝・表準書（経術）・歴史・国書・文章に類別し、再び記すが、前四丁と重複するもあり、せぬもあり、体式未だ整わない。前半も厳密な四部分類ではなく、邦人撰述書も混じている。

巻末の附録四丁は、二段又は三段に記され、必読書目と云うよりも、或は学塾の所謂るレファレンスブック・蔵書目等かも知れない。邦人の著作には作者名が付され、冊数も存するが、後半は冊数は殆ど記されない。末に「ヘメ百八ケ八月十九・廿日／ウチル」の記載があるが、意未詳。何れにせよ、著者が初心の塾生等のために編まんとし、未だ定稿を見ぬ幾つかの覚・備忘を綴り合せて、一書と為したものであろう。

門田朴斎、福山藩儒、菅茶山の養子たることあり、明治六年没、享年七十七。朴斎また浜野氏の郷里の先学であった。八〇九―四―四一―一

不尽山（外題）〔浜野知三郎〕編　自筆　大二冊（仮綴）

第二冊の本文と共紙表紙（二四・八×一七・一糎）中央直に「不尽山　一（二）」と書さる。双辺（一八・五×一二・八五糎）有界一三行、下象鼻に「岐阜県大垣中学校」とある白口藍刷野紙五丁遊紙とす。巻頭「富士山記　都良香（本朝文粋巻十二）」と、富士に関する記述を抜抄。料紙は前述の他、双辺（一八・九×一二・六五糎）有界一二行白口単黒魚尾藍刷野紙、双辺（一八・四×一二・六糎）有界一二行白口藍刷野紙、双辺（一九・三×一二・七五糎）有界一二行、版心に三輪文様ある白口藍刷野紙の四種を用う。第二冊美濃紙使用、無辺無界一三行、字面高約一八・〇糎。上冊七〇丁後に遊紙三丁。下冊八丁白紙一丁ありて又五丁、以下白紙。なお書継むとしたものであろう。上冊に〔大正元年九月二（以上浜野氏筆）〕十七日東京朝日新聞「乃木将軍富嶽の詩」貼込まる。

本書は諸書から抄出した名峰富士の抜書集成で、長唄や諺、富士を冠せる地名や、果ては漢籍に引かれた富士迄出てくる。但し抜抄は、文学歌謡諺の類の広義の文学書よりの引用が多く、地誌や純粋の紀行類は引かれること少い。八〇九―四―四二―二

北山先生論語説二〇巻（存郷党第十以下）〔山本〕北山撰　中嶋〔東関〕（嘉春）輯　岡本元長等校　写（寄合書

―或は校者か）　大三冊

香色表紙（二六・五×一九・一糎）貼題簽に「北山先生論語説　四（五・六）」と書し、直に目録外題、第四冊「郷党　先進／顔淵」、第五冊「子路　憲問／衛霊公」、第六冊「季氏　陽貨／微子　子張／堯曰」。巻頭「北山先生論語説（第十五―十八同）／（隔一行）／弟子　中嶋嘉春　輯録／（隔一行）／門人　岡本元長　校（第十五同・第十六以下校者「田中之業」とす）／郷党第十」と題署して本文に入る。第十一は内題下に「巻之六」、第十二同「巻之七」、第十九・二十同「巻之十九（二十）」とあり。第十三・十四は「巻之」とのみ。校者、第十一―十四は「藤田季充」と署さる。無辺無界一〇行二一字、師説低一格、集注低二格。字面高約二〇・二糎。朱句点朱引、ままに朱声点あり、肝要語を朱筆にて囲む。朱墨校字あり、疑問の箇所には訂正用の切紙挟込まる。尾題「北山先生論語説巻之六（第十一先進篇に該当）終」「同巻之十九終」「同巻之二十大尾」。第十・十五―十八尾題なく、他は「同巻之」とのみ記す。末に「孔子生卒考」二丁存す。第四冊一九（第八丁別筆）・二六・二四丁、第五冊一七・三一・二〇丁、第六冊一〇・二四・一三・一六・五丁。

本書は、山本北山の論語説を弟子の中嶋東関が集録し、岡本元長等が分担で校したもので、巻数表記にも見える如く未定稿本である。一〇巻とするか二〇巻と為すか、未だ決せず、校者によって区々である。乃ち岡本元長校の第十郷党第十五衛霊公は、内題・尾題共に巻次を記さず、藤田季充校の第十一先進から第十四憲問迄は、普通なら「巻之六」とすべき第十二顔淵を「巻之七」としたのが失敗で、第十三・十四は巻次を立てず、尾題も第十二以後入れられていない。田中之業校の第十六季氏以下は、末二篇は内題尾題共篇次を巻次とするが、前三篇には記されない。論語の巻次は、篇立に従って二〇巻とするか、二篇宛の一〇巻か、或いは上論・下論の二巻と為すものが多い。本書は校者により、一〇巻とするか二〇巻とするか、未定であった如くで、その上顔淵を巻之七としたことで、よけいに混雑してしまったものであろう。

本書は書写の体式から、或は校者の自筆稿本ではないかと思われる。「孔子生卒考」は「師曰」の後に、一格を低して「嘉春按」の按語がある。本書は未刊。新潟大学に完本があり、本文庫にマイクロフィルムが将来されている。それに依ると、文政十二己丑年十二月　中島嘉春謹識の「北山先生論語説附言」

を冠せ、

嘉春　幸得事二十餘年、……嗚呼、　先生揚名伝道、万世不朽、固無論焉、然其論語説、未有成書可伝于後、為恨深矣哉、是以輯録所畧記之師説、然其精辨快論、不能悉記之、但挙章章所説大義、次々竝挙窃所見之朱子集註論語徴之非、以告吾党士、冀吾　師説、伝于後世無窮也、然是但侍講日、所聴、恐有闕漏多也、……

と書されている。因みに第一・二は男中島嘉通校、三―六・九は岡本（三、木と誤る）元長、七・八は田中之業の校になる。山本北山、文化九年没、享年六十一。中島東関、高田藩儒、天保六年没、享年六十四。ハ〇九―四―四三―三

名所叢誌　〔浜野知三郎〕編　自筆　大二冊（仮綴）

白色素表紙（二五・一×一七・一糎）に直に「名所叢誌　一（二）」と書さる。巻頭「河原院／一山城名勝志三、百六十一丁祇陀林寺百六十三丁広幡院の条参看」と、引用参考書を記して本文に入る。双辺（一八・五×一二・五五糎）有界一二行白口単黒魚尾青緑刷野紙使用。朱引（赤インクも交ふ）あり。上一一〇、下一〇九丁。

名所旧跡の諸書からの抜抄で、宮所に関するものが多い。下冊は「宇治橋参考書」と題し、「一日本霊異記弘証／一古京遺文宇治橋ノ考証アリ／一工藝志料……」とあり。参考書多き項は、それのみを先ず記し、本文の引用は別丁を以て行う。前掲不尽山と同類の、浜野氏の抜抄編纂になる書物だが、主題が拡がりすぎ、やや散漫の嫌いがある。ハ〇九―四―四四―二

拗論　〔阿部正倫〕（緒水館主人）　写　半一冊

薄海松色表紙（二三・八×一七・一糎）双辺刷枠題簽に「拗論　完」と書さる。緒水館主人題「拗論自序」一丁を冠せ、巻頭「拗論」と題し、一行を隔て「遠所好而近所忘」と小題し、本文に入る。双辺（二〇・三×一三・六糎）有界九行白口単黒魚尾墨刷野紙使用。片仮名交り文、送仮名風に小書され箇所あり。誤記擦消書直さる。版心表丁中縫に丁付。第八丁表末行に「寛政九年丁巳仲夏」と識さる。次に享和紀元孟夏之月　臣太田方謹志〔跋〕一丁あり。本文八丁。

緒水館主人福山藩主阿部正倫の述著で、本書成立の縁由は、自序に詳かである。

拗ハモトルトヨミテ世ニ云モンチナルコナリモチルト同シ世間ノ事夏ハ熱キモノ冬ハ寒キモノトノミ心得タルモノ多シ然レ𪜈夏モサムキコアリ冬モ暖ナルコアリ白キトミルニ黒キアリ黒キト

思フニモ白キヿアリサレハ片々ヨリテミル寸ハ古語ノ瑟柱ニ膠スルノルイニテ世ニイフ杓子定規ナルヿモアラン我此論ハタヽ世ノ人ニモチリタルニハアラス夏ノ中ニ小袖ヲシタテサセ冬ノ間ニカタヒラヲ忘レサランタメノ戒トシテ我独居ノ座右ノ銘トナスノミ

太田全斎の跋にも

老子ノ曰ク正言ハ若シレ反スルカ此心ハ凡天下ノ正論ハ一世ノ常言ニモトルカ如シトナリ

吾　君一日此御著述ノ書ヲ出シテ示シ玉ヒヌ謹テコレヲ披キテ熟読シ始テ正論ノ反セルカ若キノ実ヲ知レリ

等とある。本名は記さぬながら、全斎の藩公阿部正倫のことと知れる。

本書十一条、題名は全て漢文で記される。急緩事而緩急事・重常而軽変・貴旧而賤新・疎近而親遠・抗尊而不卑・択智而用愚・火慎勢微・刀用不利・弓欲弱馬欲遅・娶不択美不厭醜。小題の付し方にも、いかにも正言若反き拗論ぶりが窺われよう。本巻を底本に、広島県史近世資料編Ⅵに翻字が為されている。

阿部正倫、藩校弘道館を設立、文化二年没、享年六十一。好学にして古典の摸刻をよくした正精の父。ハ〇九―四―四六―

二

琉球国中山世鑑五巻　尚象賢奉勅編　写（〔浜野知三郎〕）

大二冊

朱色空押雷文牡丹唐草文様表紙（二七・二×一九・二糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「琉流国中山世鑑　上（下）」と書さる。扉「琉球国中山世鑑　序一之二（三之五止）」、中扉「琉球国中山世鑑序」あって、日本慶安庚寅太呂吉旦　中山王　尚円公嫡孫浦添王子若王月浦六世後胤大嶺臣　象賢撰「琉球国中山世鑑序」二丁、「琉球国中山王舜天以来世纘図」一丁、「先国王尚円以来世系図」二丁、「琉球国中山王世継総論」九丁を冠せ、中扉「中山世鑑巻之一 共六」（「琉球国中山世鑑巻之二（一五）」）。巻頭「琉球国中山世鑑巻一（三・五）（巻之二〈四〉）」と大題、「琉球開闢之事」と小題して本文に入る。無辺無界一〇行二一字（下冊二〇字）内外、字面高約二〇・〇糎。片仮名交り部分は低一、二格、上冊二〇字、下冊一九字（巻四、一八字）ほど。朱墨校字を交え、巻二第十丁表迄朱点を打つ。尾題「琉球国中山世鑑巻一（三）終（巻四終）（巻六終）」。上冊巻一―二二、巻二―一七（末欠か）、下冊巻三―二三、巻四―一二、巻五―三三丁。

琉球初の正史。明の正朔を封じていた琉球の、嘉靖三十四年乙卯六月廿五日迄の年代記で、阿摩美久の昔より、「尚清王在位二十九年寿五十九ニシテ薨御成給　第二王子嗣立給是為中山王尚元」迄記されている。系図には「原書系線断レタリ蓋シ尚宏ヘツヾクカ」等朱校注が施されている。

琉球は原則として中国の正朔を封じたが、「日本慶安庚寅」の序や、片仮名書のスタイルにも見られる通り、中日両国の間に存在した小国の揺れと苦悩が、この正史の表記からも伺えよう。後、清朝冊封使側に備え、本書を基に漢訳し、「中山世譜」が撰述された。しかし、島津関係の不都合な部分は削除され、後に別篇として附されている。

慶応英文科出で、原典を調査網羅集成し、系統別に底本を選定翻字し、書誌学的な批判に耐え得る各種の資料集を作成された横山重氏の、初期の為事「琉球資料叢書」第五に、内閣文庫本をもとに翻印され、東恩納寛惇氏の解題が附されている。

琉球関係資料は、英人フランク・ホーレー蒐集の九三六点約二千冊が、ハワイ大学に宝玲文庫として収蔵されており、目録も公刊されている。ハ〇九—四—四六—二

諗癡符（題簽）存巻一五〔岡本況斎〕（孝）編　自筆　半

二冊

柴色表紙（二三・二×一六・〇糎）双辺刷枠題簽に「諗癡符十五上（下）」と書さる。㊀耍需儒弱—㊁先哲不知淮南子真本の目二丁を冠せ、巻頭「㊀耍需儒弱」と小題して本文に入る。無辺無界九行一九字小字双行、字面高約一六・一糎。解説文は標字の後低一格で記さる。㊄河図洛書中に朱墨図、㊆伊洛諸子中に吊書の学系図が存する。上冊五八、下冊㊉洛随より、五六丁。標目の〇印は焼印。

諗癡符とは、顔氏家訓等に見える「癡者（しれもの）につけて売る札」、乃ち下手な文章を見せびらかす恥さらしの謂。耍需の巻頭は以下の如く始まる。

耍俗作需需俗作耍非正字而仮借也何以知之既許以来耍需別部而或混写故為非通借也

いかにも二重のペダンティスト況斎らしい。廿五には、殺青という書誌学に関係する項も存する。

本文に署名はないが、「孝按」の按語があり、「友人太田氏云」「友人川目氏拠此文戯象亀形新造之図」等の記載がある。川目氏は本稿㈠で略述した「校註韓詩外伝」の編撰者川目直ではなかろうか。岡本況斎既出。次掲と合せハ〇九—四—四七—

三の番号が与えられている。

詒癡符（外題）存〔巻一三〕〔岡本況斎〕（保孝）編　自筆　半一冊

黄色空押菊花文様表紙（二三・〇×一五・一糎）に直に「詒癡符」と朱書。「越裳氏越嘗　越常」より「西漢之人名曰延年者」迄目二丁を冠せ、巻頭「越裳氏　越嘗　越常　白雉　九訳」と小題し、「韓詩外伝巻五第十二章朝鮮本程栄本作越裳毛晋本作越／嘗」と本文に入る。無辺無界九行二〇字小字双行。字面高約一七・二糎。標記書入あり。前掲書と書振りは異なるものの、一筆の如し。自筆浄書本であろう。一〇三丁。

本文中に「孝按」「保孝按」、標記中に「保孝按」等の按語がある。「以臣為姓」の標記に、「此所引史記用嘉／靖板」等とある。本冊巻次を記さぬが、尊経閣文庫蔵自筆本と比するに、巻一三の部分に当る。尊経閣本には、晩年に至る朱墨改定の筆が、稠密に加えられている。

本書は、語の正訛・正俗、事項の由来・沿革等につき、一々出典を掲げて並べたもので、三〇巻各三〇項目の大部にわたる。尊経閣文庫に自筆本が存する。此書は三〇巻目録一巻半三一冊（目録に「温故堂文庫」朱印、巻一・二・四―一一迄、巻末に「岡」墨印押捺さる）、補遺巻一八迄半一八冊、続補遺巻一二迄半一二冊、計六一冊より成る。「文政八年正月　況斎岡本孝識」序から、本書成立の事情を窺っておく。

此書也非素有編輯之志而発筆也或答於門生友人之問或出於欲減異時捜索労（便を抹消訂正）固非一時之録故無書名也児輩強請名之因呼之曰詒癡符児輩遽有疑色予徐曰此書也未免訛謬恐識者所譏豈唯巴調之詩而已乎故名之事詳顔氏家訓文章篇汝就而看之

八〇九―四―四七―三

老圃詩稿　安積〔澹泊斎〕（覚）　写　大一冊

濃香色表紙（二八・一×一九・〇糎）。巻頭「老圃詩稿」。無辺無界九行一七字小字双行、字面高約一九・七糎。巻軸「碧於亭漫興」末に「碧於亭老圃安積覚」と署さる。全一七丁。

水戸藩儒、老圃安積澹泊斎の詩集で、未刊。「己亥三月還水戸道中口号二首」「臘月六日源義公忌日入廟展拝適常山文集繕写新成簡館僚数子以述懐」等、水戸藩との関係を示す詩や、「和鳩巣室兄新年偶作韻十二首取其二」等、交友関係を知る詩が存する。

安積澹泊斎、朱舜水に学ぶ。四十有餘年にわたり、彰考館総裁を勤む。元文二年没、享年八十二。八〇九―四―四八―一

六郡めくり（抜萃）　菅〔茶山〕（晋師）　天保九年一一月写（渡辺延秋）　半一冊

黄色空押卍つなぎ表紙（二三・九×一七・三五糎）金砂子散し双辺刷枠題簽に「六郡巡菅茶山稿」と書さる。扉左肩に「六郡巡　抜萃　全」。遊紙一丁あって、巻頭「六郡めくり／加判　吉田助右衛門豊功／大目付　中山斧助光昭／徒士目付　枝与市房盛／学宦　鈴木圭輔圭／菅太中晋師」と題署、以下餘白にして、裏丁より「形勝気候　私ニ形勝ハ山川ノ事ヲ云カリニヲハス」と小題して本文に入る。無辺無界一二行、片仮名交り文。字面高約一九・八五糎。附録二丁、附図、湯野村茶臼山古城図等七丁あり。巻末に、「右六郡巡全書新居寿五郎繁豊蔵本借得写之／天保九年戊戌冬十一月下浣　渡辺茂八郎延秋（花押）」の書写奥書が存する。本文概説五丁、遊紙一丁あって、福山治下一丁、深津郡安那郡品治郡蘆田郡沼隈郡分郡六郡各説二二丁。

茶山は、寛政四年福山藩儒医、享和元年には儒官として弘道館で講じ、福山志料の編纂を命じられている。本書は、公務として藩下六郡を視察した折の記録「六郡めぐり」の抜抄で、ま「晋師按ニ」の按語がある。

菅茶山、黄葉夕陽村舎主、天明年間郷里神辺に廉塾を開く。この私塾での弟子達の生活の一端は、本稿㈣「歳寒堂遺稿」の項に触れた。文政一〇年没、享年八十。浜野知三郎氏に「菅茶山先生」（大正一五年刊）の著作がある。　八〇九―四―四九―一

論語古伝一〇巻　仁井田〔南陽〕（好古）　写　半四冊

柴色表紙（二三・三×一六・一糎）に直に「論語古伝　元（亨・利・貞）」と書さる。巻頭「論語古伝巻之一（―十）／日本　紀伊　仁井田好古撰」と題署、「学而第一」と小題して本文に入る。無辺無界九行二〇字内外、解文低一格小字二五字内外。字面高約二〇・六糎。朱筆の句点声点校字あり、不審紙貼らる。押紙による訂正あり。元冊一〇・一二・一五、亨冊一四・一七、利冊一七・二一、貞冊一五・一五・一〇丁。裏表紙見返に「浜／野」朱印押捺さる。

漢唐宋の旧新注、邦人注を併せ、「好古曰」として自説を掲げる。古伝とある如く、漢人の注、また邦人では「維楨曰」として、仁斎説を採る事多い。昭和一〇年九月、和歌山の南紀徳川史刊行会より出版された和歌山県師範学校（今和歌山大学）蔵自筆本の影印と比するに、やや出入がある。「直温按。」の貼紙が一箇所あり、筆写者の如きも、何人か未詳。本書は、江戸

期には出版されずに終った。

仁井田南陽、和歌山藩儒、嘉永元年没、享年七十九。八〇九—四—五〇—四

忘れかたみ　〔浜野知三郎〕編　自筆　大二冊（仮綴）

本文共紙表紙（二四・九×一七・一糎）に直に「忘れかたみ一（二）」と書さる。野紙一丁を遊紙とし、巻頭「魚をナといふこと」と小題して本文に入る。料紙は美濃紙の他、以下七種の野紙を使用す。双辺（一九・二五×一二・八糎）有界一二行、白口三輪を印する藍刷野紙。双辺（一八・四×一二・五五糎）有界一二行白口藍刷野紙。双辺（一八・六×一三・〇糎）有界一二行白口単黒魚尾藍刷野紙。双辺（一八・八×一二・五糎）有界一二行白口藍刷野紙。双辺（一八・六×一二・五糎）有界一〇行、白口、中縫に〇、裏丁匡郭外下端に「巨鹿城清水製」と印する藍刷野紙。双辺（一八・四×一二・三糎）有界一二行白口単黒魚尾藍刷野紙。双辺（一九・三×一二・六糎）有界一二行白口藍刷野紙。年官年爵ノ事は美濃紙に書写さる、無辺無界一四行、字面高約一九・六糎。まま朱引朱訂朱校が為され、朱の圏点が施されている。項目首丁等の書脳部下端に、項目名等まま略記さる。上冊三五丁、遊紙一丁あって修験道以下二丁、遊紙一丁あって年官年爵ノ事以下一九丁、遊紙一丁越佐史料以下三丁、遊紙一丁二重織物以下一八丁、遊紙一丁檜皮屋以下二九丁、遊紙二丁。下冊遊紙二丁てぐるま輦以下三四丁、遊紙八丁結狩衣以下二三丁、遊紙一丁皇族称呼以下九丁、遊紙一丁腰小旗以下三三丁、遊紙一丁〇（丸印朱筆）染羽の矢以下一二丁。裏表紙は、見返部左肩に「車輿」と書されし反古を用う。

浜野氏の雑抄詞華集で、内容古典に限らず多岐にわたり、辞書等の作成時にも利用できたであろう。項目を拾うに、点心・五月・もの云々・すこぶる・いほり点・赤本　草冊子のようなものから、明治卅三年十二月卅日発行、東京朝日新聞五千百九十九号による、力士常陸山・力士の給金迄、まことに何でもある。標注に「萩野由之氏云『壺切剣……』」等の書入も存する。袋等に入れ、随読随抄幾つかの山を作り、後一冊に纒めたものであろう。カード学文以前の知られる一書である。八〇九—四—五一—二

金光明最勝王経音註　写（〔浜野知三郎〕）　大一冊　薄様紙　影写万延元年黒河春村摸写書入古抄本

緑色布目空押唐草文様表紙（三三・七×二三・九糎）貼題簽に「金光明最勝王経音註」と書さる。安政七年三月十日黒河春村識〔序〕

一丁、原序（凡例）二丁を冠せ、第三丁「一部十巻三十一品／第一巻　序品　如来寿量品」と小題して本文に入る。無辺無界六行小字双行。字面高約二四・六糎。版心部折山表に丁付朱書さる。虫損跡もそのままに影写され、訓点・声点・春村曰の標記や案語等、そのまま朱書されている。本文第十二丁表で終り、裏に以下の元奥書あり。「承暦三年己未四月十六日抄了／音訓等用借字大底付之仍只今／無清書孔追々引勘字書可一完之／所入之紙十二枚」。「押紙」と朱書し、木記の如く単辺の中に「貞観九年十一月紀命七大寺講演仁王／般若云々与専寺僧綱及別当三綱立（朱筆五に訂す）／師等相共勘（朱筆勘に訂す）加検察云々／五師大法師（草名）」。遊紙表に「万延元年後三月十二日摸写之後一読之次聊加僻案了／花押（春村）」の朱筆識語が存する。薄様紙使用のため、読解の便を計って入紙が為されている。どうさびき。

本書につき、春村の前識語に詳しいので全文を引録する。

此書は金光明最勝王経の音註なり跋文のおもふきにては今よりは八百年のいにしへ　白河院の御時にあたりて註しけむものといふへけれと筆つかひかつ訓註をおもふにさはかり古代の筆記ともおほえすもし建長のころなとにもやあるらむかく心つきて猶くりかへし見るに跋記の筆意の拙劣なる事本文とはいたく異なりいまた原本をみしにもあらねはうけはりてもいひかたけれと疑ふらくは後人のしわさに本書をひときはふるめかさむとて偽造して副しにはあらしか具眼の人よく決めてよかしたゝし此古鈔本ははやく山川真清といへるか秘蔵してもたりけるをさきに我友横山由清こひとりて摸写したるをふたゝひかり得てかく物しつるなり其後真清もなくなりにしかはその抄本も人手に渡りて今は新宮侯の秘庫のうちにありとそ

原本は新宮侯水野忠央の許にあると云っている。なお横山由清が、その摸写本を木村正辞の許に携え、それに応えた正辞の攷証と、枳園の攷証補とが、本略解題の㈢に載るので、参看して頂きたい。

春村は、疑しんだ跋記の箇所に、以下二条の朱書入を行っている。

此跋記は筆意拙劣にして本文と同筆ならす必後人の偽造なるへき事疑ひなしさて本文は巻首にも辨へたる如く筆勢といひ仮字つかひといひ六百年はかりのものとこそおほゆれ（承暦三年……）

按に此文は三代実録巻十四貞観九年十一月廿九日条にみゆ然とも何の故を以てこゝにある事をしらすもし此音註の記者も七寺のうちの五師にてやあるらむ（貞観九年……）

こうした仏教経典の音義音注の形で、我国の悉曇音韻の学は進んでき、その方法は、諸学の発達に示唆と影響とを与えている。古典注釈の方法等も、こうしたやり方を敷衍したものだと云えよう。なお金光明最勝王経と云えば、未だ慶応に寄贈される以前の財団法人斯道文庫時代に、文庫長春日政治氏の著された「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」が、学士院賞を授与されている（斯道文庫紀要第一、昭和十七年刊。後勉誠社より春日政治博士著作集の一として、影印再刊）。

黒河春村、慶応二年没、享年六十八。その蔵書は息真頼が充実させ、孫真道へと受継がれ、一部が実践女子大学、国学院大学、ノートルダム清心女子大学、宮内庁書陵部（全て目録あり）等に購入されたが、分散してしまった。序に云うその友横山由清の蔵書は、大部分が大東急記念文庫に入ったが、一部は散じ、本稿(二)所収の、月の屋横山由清旧蔵「江家次第」は、そうしたものの一である。ハ〇九—四—五二—一

華厳経私記音義　写（〔浜野知三郎〕）　大一冊　薄様紙影〔大矢透〕（水斉主人）明治三九年一二月影写木村正辞写本

香色布目刷毛目格子文様表紙（二六・九×一九・一糎）双辺刷枠題簽に「華厳経私記音義」と書さる。巻頭「□巻花厳経私記上音義」と題し、序の音義より始める。「新翻華厳経音義（八十巻花厳経音義上巻・太方広仏花厳経音義巻下）」等ともあり。無辺無界八行、字面高約二〇・七糎。正辞の朱筆校字もそのまま影写さる。本文第十丁表で終り、裏に「八十経私記上下二巻依破損為興隆之今修復軸表紙付早／元禄六年酉卯月中旬　法印英秀／僧定昭之本也」の修復識語。後掲水斉主人、国語学人大矢透の識語二則一丁を挟んで、音義又七丁（後二丁は追込まず、本七丁には朱校字は存しない）。後半或は後の増補・別抄か。

本書に就きては、水斉主人の識語二則に詳かである。

原本ハ徹定和尚ノ所蔵ニシテ木村正辞翁ソノ／仮名釈アルモノ、ミヲ抄出シオケルヲ借覧ノ次自ラ／写シ置ケルモノナリ。〇朱ノ墨ノ圏点ハ木村翁ノ／　明治三十九年十二月十三夜　水斉主人（朱書）

四十年八月ノ末高野ヨリ奈良ヲ経テ京都ニ／出デシヨリ知恩院ニマ井リテ此書本ノ有無ヲ尋／ネタレハ無シトイヒキ

尚増上寺ヲ尋子テム木村／翁其本ヲ見ラレシハ徹定ノ同寺ニアリツル程ナリ／トキ、ツレバナリ　水斉又識

徹定和尚は「古経題跋」の編著ある鵜飼徹定。木村正辞は、前掲書とも連関し、本稿㈢で述べた。（追記四）

大矢透、浜野氏と親交のあった国語学者で、昭和三年没、享年七十九。仮名源流考及証本写真・仮名遣及仮名字体沿革史料等の編著があり、著作は多く勉誠社から影印再刊されている。

ハ〇九―四―五三―一

大広益新定四声三音字函玉篇大成　鎌田謙斎編　写（狩谷棭斎ヵ）　大八冊半四冊

香色表紙（二四・七×一七・〇五糎）、第九冊以下（二三・八×一七・〇糎）に直に、以下の如く、十二支と部首の画数とを組合せた目録外題を書す。子一二（一―又）、丑三乾（口―女）、寅三坤（子―彳）、卯四上（心―无）、辰四中（日―气）、己四下（水―犬）、午五（玄―立）、未六乾（竹―色）、申六坤（艸―襾）、酉七（見―里〈藍書〉）、戌八九（金―首）、亥十十七（香―龠）―画数以下藍書。巻頭「大広益新定四声三音字函玉篇大成／謙斉謙田輯録」と題署し、本文に入る。単辺（一五・〇五×九・四糎）有界六行八段、上部黒口をそのまま魚尾とする墨刷野紙使用。魚尾下は白口にて、下部に丁付を記す。朱墨藍の標記書入あり。次冊にわたる場合、途中の行で切取り、分冊する事が多い。第一冊三五（裏四行で切取り、二行は後冊に貼付）、第二冊通七四（表四行で切取り、以下後冊）、第三冊通一〇九（表、裏より後冊）、第四冊通一五〇、第五冊通一八七（裏二行迄。四行は後冊に貼付）、第六冊通二二七、第七冊通二八四（表三行迄、以下後冊。二百六十八九・二百八十二三として跳丁あり）、第八冊通三三九（表一行迄、以下後冊。三百三十二三と跳丁）、第九冊通三八七（裏五行迄、以下後冊。三百六十より三百六十五、丁付虫損、うち一丁に跳丁あるならむ）、第十冊通四五四（首一行分は三八八の初行の前に貼付。裏五行迄、以下後冊。四百三十六七・四百五十二三と跳丁あり）、第十一冊通五一〇（首一行分は前冊同様四五五の初行前に付加。表二行迄、以下後冊。四百八十一二跳丁）、第十二冊通五六五丁（五百十七八・五百四十三四跳丁）。総裏打。天地裁断さる。

朱墨藍の三筆を用い、標記書入を為し、細字で四声・漢呉唐の三音・意義を稠密に解いた五六五丁に垂んとする字書。塗抹や切貼、上層欄脚への、他部参照や改訂編纂のための藍朱の書入が多い。

朱で呉音を示す他、朱筆で書かれた親字は、別体古体俗体等で、本字が別掲され、解説も簡単に終っている場合が多い。凡例がないのでもう一つはっきりしないが、説明の朱書も又――切等と別音を示しており、親字の場合と符合する。

本書の字体は梭斎の筆に似、謙斎の編著を筆写し、梭斎が、かなりの増補改定書入を行ったものではないかと思う。本文の細字は別としても、目録外題や藍筆の箇所には、梭斎の筆の特徴がよく出ているように思う。

編者の鎌田鎌斎は、第一冊裏表紙に「謙斉老人著／善庵先生高弟」と朱書され、第二冊裏表紙に「謙斎老人箋／万笈堂本／謙斎老人撰」と墨書、第五冊裏表紙に「梭斎居士」の朱書がある。これに依って朝川善庵の高弟であったことは分るが、生没年未詳。梭斎との関係又未詳。或は、万笈堂から刊行の計画でもあったものであろうか。ハ〇九―四―五四―一二

追記

一、顔淵―憲問篇の井川長恭自筆稿本、大一冊が筑波大学図書館に存する。また、早稲田大学図書館に、学而―雍也篇の自筆稿本、大五冊が存する。この第一―三冊は「井川長恭述」の井川に抹消符○を打ち、松田と書改めてある。第四・五冊は井川のまま、第四冊は断句のみで、訓点は施されていない。

二、柳原家旧蔵本は、かなりまとまって岩瀬文庫に入っており、紀光自筆の物も見える。

三、第二冊は、恐らく内閣文庫等に存する文保二年元奥書本系の影写であろう。川口久雄氏は「真福寺本 文鳳鈔」解説で、本帙を内閣文庫蔵二系統本の影写とされたが、字形や、本文庫本に存する虫損箇所の鉤字が内閣本では欠字であること、内閣文庫本第三に存する錯簡が本帙には存しないこと等から見て、如何かと思われる。第四は、今内閣本を見ることができず、フィルムによって検したのみであり、判断を差控える。

四、徹定所蔵の原本は、後小川勝之輔氏の有に帰し、昭和十四年十二月貴重図書影本刊行会より影印された。岡田希雄氏は解題で、本書に言及されている。